



少

し前、大森から温泉津(ゆのつ)沖泊(おきどまり)まで、石見銀山を支えた「銀のみち」を歩いたことを書いたが、先日大森から轆ヶ浦(ともがうら)に至るもう一つの銀のみちを歩いた。

石見銀山がその豊富な埋蔵量を誇ったのは戦国末期から江戸前期にかけてで、世界の総産出量の三分の一を占めた。轆ヶ浦道は温泉や焼き物で有名な温泉津から直線で四キロメートルばかり北東にある。銀の採掘が始まった十六世紀半ばはその統治下にあつたため、戦国大名大内氏が街道を開いた。ただ、使われたのはわずか三十年あまりに過ぎず、毛利氏の支配に移ると、代わって沖泊ルートがその役割を担った。

企画したOさんの調べによると、轆ヶ浦道は沖泊道に比べわかりにくい。そのための現地ガイドがいるのだが、一万三千円のガイド料がある。大人数ならまだしも四人でその金額を払う気はだれにもなく、地図を手に歩くことにした。

出発前、石見銀山ガイドの会に寄って、地図を受け取り話を聞いた。七十代前半か、短軀ながら屈強な感じのガイドの男性が言う。わかりにくい。三叉路がいくつもある。本当の銀の道は藪漕ぎしないと通れない。マムシやハチに気をつける。サルも出る。しつこければ闘え。たまらずOさんが、

「世界遺産でしょ、どうして整備しないの。」
と言うと、

「むしろも言ってるんですがねえ、あんまり人の通らない道には金をかけたくないんでしょなあ。」

そんなにわかりにくい道なのかと嘆くと、
「だいたいガイドがおらんとわからんのですわ。」
と言ってニヤツと笑った。それ以上何も勧めてこないところが商売つ気皆無で好感がもてた。

熱中症警戒アラート発令下、蒸し暑さに滝の汗をかき。戦国大名が覇権を争い、小説『しろがねの葉』の主要な舞台にもなった要害山吹城趾にも登った。

途中螺旋状に崖を這うようにして登る細い道に「轆ヶ浦五・六キロ」の標示を見たが最後、岐路に何度も出合うのにまったくどつちに進んでいいかわからない。地図を見てもわからず、勘を頼りに歩く。海に向かうのだから下るはずだと選んだ道をしばらく進んだ先によく民家を見つけ、聞くも今ひとつわからぬ。もう少し先に行くと思いがあつた気がするという言葉を頼りにさらに歩く。確かに標示はあつた。

「轆ヶ浦五・六キロ」。どこをどう歩いたものか、山中をぐるぐると回って元に戻ったのである。含み笑いで送り出してくれたガイド氏、我らを謀る狐狸の類いではなかったか、など考えて楽しんでしまった。

♪大阪の子 大阪の子 背の高い 大阪の子 大阪の子

そういう歌があつたようだ。その歌詞の背の高いを、背の低いに替えて歌う子がいた(当時の私は背が低く、前から二番目だった)。出雲市立第二中学校という一年八クラスの大きな学校にスクールバスで通うようになった私は、知らない子ばかりの中で、大きな障壁の前にあがいていた。言葉だ。「ちやうやん」「先行つてるでえ」などと平気でしゃべることができない。「ちがあがね」「先行つちやうけんね」など、聴き慣れない言葉が耳に入ってくる。必要なこと以外なるべくしゃべらないようにした。そのうち、「だけん」「しちよう」など、語尾を変える言い回しを身につけ、少しずつ友だちもできていった。それが、地元の人以上の出雲弁になつていったのは、祖母や近所のおばさんたちの会話を毎日耳にしていたせいもあるが、この地への同化をことさら進めようとの思いがあつたのかもしれない。

学校から帰ると、タマではなく祖母と伯母がいつも家に居た。父と母は立ち上げたばかりの布団作りの仕事で忙しい毎日。工場には大きなミシンが何台も並び、働いて来る地元の伯母さんたちに交じって母もミシンを踏み、父はできた布団を売りに回っていた。祖母と伯母との暮らしは、泉南の暮らしからすると一昔前という感じで、煮炊きは土間に置かれた竈で行われ、水をはった五右衛門風呂はこで(出雲弁で落ち葉、我が家ですつたのは松葉)を焚きつけにし、薪をくべて沸かした。風呂場から少し離れたところに、薪やこでを積んだ小屋がある。そこに入れるこでを集めるのは祖母と伯母の仕事。そのこでかき一度だけ付いて行ったことがある。防風のため砂山には松が植わっており、枯れ落ちた針のような葉が地面に敷き詰められている。それを熊手でかき集め、塊にして、背負子に重ねていくのだ。すでに七十の後半になっていた祖母も、脚を引きずって歩く伯母も、こでの塊を六つも七つも重ねて運ぶのに、私は二つがやっとだった。暮らしに根付いた力というものを見せつけられた気がした。相変わらず海を彷徨う日々ではあつたが、少しずつ祖母や伯母と行動を共にすることも増え、私の身体の中を流れるものに変化が生じてきていた。

空き家 20

木幡智恵美

生家の思い出⑦

30代フリーター 大谷翔平、井上尚弥、藤井聡太らを見ていると、21世紀は天才の世紀ではないかと思えてくる。20世紀にも数々の天才がいたが、一般の民衆には縁遠い学問や芸術の分野に偏っていた印象がある。

年金生活者 大谷、井上、藤井の凄さは、持てる技能のイノベーションを続けていることだけにあるのではない。彼らはそれぞれの分野にパラダイムシフトを引き起こした。野球を変え、ボクシングを変え、将棋を変えた。

同様の天才を世界の名の知れた人物の中からあげるとすれば、イーロン・マスク、ドナルド・トランプといった名前が思い浮かぶ。絶えざるイノベーションが常態化し、それが世界経済を支える時代にあつて、このふたりは、そのイノベーションをも超えるパラダイムシフトを促す役を担っていると言える。

30代 あのふたりを嫌う者は世界に多い。

年金 マスクが目指す自動運転の実現や火星への移住は、実存主義から構造的な安全保障政策に突き進んでいるのは、自分の考えを持ち合わせず、「俺は安倍もやれなかつたことをやっている」を唯一の売りにするしかないからだ。そして再選、続投を確実視されていない点もふたりは似ている。

30代 アメリカにケンカを売られた中国のほうは若者の失業率が高まるなど経済が危なくなっている。福島第一原発の処理水放出に対して、習近平政権は日本の水産物の輸入を全面停止する強硬措置をとり、経済の低迷に不安を募らせる国民の目を外にそらせようとする、権力者のお決まりの行動に出た。

年金 ロシアに対する経済制裁がそれを実施する西側諸国にも打撃を与えているように、水産物禁輸は規模は小さいものの、中国にとつて痛いはずだ。それでも、実行に踏み切つたのは、西側諸国が当面の損得勘定を超えてロシ

主義に本流が移つたフランス現代思想の転換を思わせる。個々のクルマという「実存」ではなく、自動運転システムという「構造」が事を決定する未来、地球という「実存」が宇宙という「構造」の中に位置づけられる未来を彼は見ている。

トランプは、東西冷戦の終結後に急進したグローバリゼーションが曲がり角にきたことを察知し、世界に先駆けて自国第一主義（アメリカ・ファースト）を掲げて、中国との対決姿勢を鮮明にした。それまで中国を巻き込みながら利潤の源泉を広げてきたグローバリ化が逆にその源泉を狭める可能性が出てきたからだ。彼は国際秩序の枠組みをひっくり返すことをもくろんだ。

30代 それのどこが天才なんだ。

年金 現在の資本主義が利潤の主要な源泉としているのは、グローバリ化と手を携えて進む絶え間ないイノベーションだ。それは生産性を向上させ、コストを下げ、世界にデフレを定着させた。富の稀少性が急速に縮減し、そのアを追い詰めることを選んだのと同じだ。

トランプが始めた対中経済制裁や、西側諸国が続ける対口経済制裁が、利潤の源泉を細らせ始めたデフレにブレーキをかけているように、処理水を口実にした、中国の対日経済制裁も同様の働きをしていると見ることができると。

30代 グローバル化といえば、ひとこ

のまま進めばやがてゼロまたはマイナスになる。そうなれば競争は必要なくなり、資本主義のシステムそのものが危うくなる。

グローバリ化イノベーションの反復にブレーキをかけなければならぬ。イノベーションに代わる利潤の源泉が必要となる。その有力候補がパラダイムシフトだ。それがどこで起きるかを知り、それを促す行動をとることは、天才にしかできない。

30代 来年の米大統領選の行方を報じる先日の朝日新聞は「トランプ劇場再現 現実味」の見出しを掲げ、「起訴のたび『トランプ劇場』が演出され、支持率は上向いている」と伝えていた（8月26日朝刊）

年金 人心をわしづかみにする発信力がトランプの人気を支えており、世界史の向かう先をいち早くつかむ洞察力がその大もとにある。

バイデンがトランプ以上に対中強硬策をとっているのは、自前の考えがなく、前任者の切り開いた進路をたどる

ろそれとセットで語られた「ボーダーレス」という言葉を聞かなくなつた。「分断」という言葉がそれにとつて代わつたようだ。

年金 東西冷戦の終結後、世界を二分していたボーダーは消え、グローバリゼーションが始まつた。空間的な境界がなくなつただけでなく、時間的な境界も消滅したと考えられた。『歴史の終わり』（フランシス・フクヤマ）が告げられ、これから先は時代を区分する境界は不要とされた。

その反動がいま到来している。ボーダーレスになることは、モノもカネもヒトも移動範囲が無限大になることを意味する。移動の速度は超高速にならざるを得ない。生産の場面では絶えざるイノベーションを強いられることになる。

ひとことで言うと、世界中がそれに疲れた。国家と資本が、ボーダーを復活させ、超高速にブレーキをかけ始めた。脱炭素も、対中、対口制裁も、その一環にはかならない。

ニュース日記 890
中村 礼治

トランプのいる時代